

《絹のはしご》

《バビロニアのチーロ》の初演に先立つ1812年3月12日、『アドリア県新聞(*Giornale dipartimentale dell'Adriatico*)』紙上に、「サン・モイゼ劇場にてロッシーニ氏が詩人フォッパの新たなファルサに作曲する」と報じられた¹。フェッラーラを発ったロッシーニは3月24日ヴェネツィアに到着し、母に宛てた同日付の手紙でサン・モイゼ劇場の歌手の顔ぶれを伝えるとともに、興行師チェーラから提案されたジュゼッペ・フォッパの台本が「歌手団にもぼくの音楽にも合っていない」と不満をもらし、「台本は[ガエターノ・]ロッシのものになると思う」と記している²。この段階でロッシーニは2種の台本を比較してロッシのそれ(詳細不明)を気に入っていたが、フォッパによる1幕のファルサ・コーミカ《絹のはしご(*La scala di seta*)》の台本を使うよう強いられたようだ(フォッパはサン・モイゼ劇場の事実上の座付作家で、前記のように新聞にもフォッパ台本と告知されていた)。

フォッパは原作を、フランスの台本作家フランソワ=アントワヌ=ウジェーヌ・ド・ブラナール(François-Antoine-Eugène de Planard, 1783-?)が作曲家ピエール・ガヴオー(Pierre Gaveaux, 1761-1825)のために書いた1幕のオペラ・コミック台本『絹のはしご(*L'échelle de soie*)』(1808年8月22日、パリのオペラ=コミック座初演)に求めた。その筋書きは、マリ=ジャン・リッコボーニ(Marie-Jean Riccoboni, ?-?)とマリ=テレーズ・ピアンコレリ(Marie-Thérèse Biancolelli, ?-?) 共作の3幕のオペラ・コミック台本『ソフィ、または隠された結婚(*Sophie, ou Le mariage caché*)』に由来する(ジョゼフ・ヴェンツェル・トマ・コオー[Josef Kohaut, 1738-1793]作曲。1768年6月4日パリのコメディ=イタリエンヌ[オテル・ド・ブルゴーニュ]初演)³。但し、秘密裏に結婚したカップルを主人公とする喜歌劇は18世紀に前例があり、チマローザの《秘密の結婚》(1792年)もその一つである。けれどもフォッパ台本は事実上ブラナール台本の翻案で⁴、登場人物の名前もドルモン氏(M. Dormont)をドルモン(Dormont)、ジュリー(Julie)をジュリア(Giulia)、リュシル(Lucile)をルチッラ(Lucilla)とするなど、イタリア語への置き換えが中心となっている⁵。(図39)

■あらすじ

全一幕 パリ郊外ドルモンの家。後見人ドルモンに内緒でドルヴィルと結婚したジュリアは、毎夜、絹のはしごで夫を迎え入れていた。それを知らぬドルモンが彼女の結婚相手にブランサックを招くので、ジュリアは彼の矛先を小間使いルチッラに向けさせようとしてドルヴィルに誤解される。召使ジェルマーノはジュリアが深夜ブランサックと逢引すると信じて眠り込み、その寝言を聞いたブランサックが喜ぶ。真夜中。ジェルマーノとルチッラが隠れて見守るなか、絹のはしごを使ってドルヴィル、続いてブランサックが現れる。やがて全員が鉢合わせして騒ぎになるが、ドルヴィルは自分がジュリアの夫と明かし、丸く収まる。

作曲の経過を明らかにするドキュメントは残されていないが、ロッシーニは4月27日付の手紙で母に、「いつものようにぼくの音楽は美しいです。ぼくの仕事がうまくいくよう願っています」と記している⁶。そして12日後に迎えた初演も大成功を収め、ロッシーニは自他共に認めるヴェネツィア人のアイドルとなるのである(後述)。《絹のはしご》の初演配役は次のとおり。

役名と声種	歌手
ドルモン Dormont(テノール)	ガエターノ・ダル・モンテ(Gaetano dal Monte, ?-?)
ジュリア Giulia(ソプラノ)	マリア・カンタレリ(Maria Cantarelli, ?-?)
ルチッラ Lucilla(ソプラノまたはメゾソプラノ)	カロリーナ・ナゲル(Carolina Nagher, ?-?)
ドルヴィル Dorvil(テノール)	ラッファエーレ・モネッリ(Raffaele Monelli, 1782-1859)
ブランサック Bransac(バス)	ニコラ・タッチ(Nicola Tacci, ?-?)
ジェルマーノ Germano(バス)	ニコラ・デ・グレチス(Nicola de Grecis, 1773-1826)



図39 《絹のはしご》初版台本

《絹のはしご》は全曲の自筆楽譜が現存するロッシーニ初のオペラで、楽曲は書き下ろしの序曲[シンフォニー]と八つのナンバーからなる。導入曲〈あっちへお行き、邪魔しないで(*Va sciocco, non seccarmi*)〉(N.1)はジュリアとジェルマーノの軽快な対話で始まり、ジュリアの叙情的なソロを挟み、ルチッラを交えた爽快な三重唱で締め括られる。次の二重唱〈あなたが良い心の持ち主だと判っています(*Io so ch'hai buon core*)〉(N.2)の前半部は感傷的な旋律でジュリアが懐柔を試み、ジェルマーノが彼女になびく様子が巧みに描写される。ドルヴィルのアリア〈どんなに魅力的か見てやろう(*Vedrò qual sommo incanto*)〉(N.3)ではアレグロ・ヴィヴァーチェの後半部に華

麗な歌唱を求め、最高音がc[♯]に達する。

とりわけ秀逸なのが四重唱〈愛しい花嫁と結ばれたなら (*Si che unito a cara sposa*)〉(N.4)で、上向する弦の音型を伴奏に人物それぞれの恋の誘惑、不安、疑いを巧みに交錯させて始まり、鮮やかなカノンのアンサンブルを挟み、活力に富むアレグロ・ヴィヴァーチェで閉じられる(一連の素材は次作《試金石》に改作転用される)。才気に富むルチッラのシャーベット・アリア〈時々心を感じるのです (*Sento talor nell'anima*)〉(N.5)を挟んでのジューリアのアリア〈愛しいを呼び、ため息をつくの (*Il mio ben sospiro e chiamo*)〉(N.6)も優れたナンバーで、コロノ・イングレーゼ [イングリッシュ・ホルン] 独奏を伴う叙情的なカンタービレ、感情の変化を巧みに表す中間部、生気に富むカバレッタからなる。初演歌手マリーア・カンタレリ (Maria Cantarelli,?-?) は経歴不明の新人で、サン・モイゼ劇場はこの春季のみ出演している(その後1817年から29年までイタリア各地でロッシーニ作品を主演)⁷。続くアリア〈恋は甘く (*Amore dolcemente*)〉(N.7)は、ジェルマーノが甘い恋の思いを語りながら徐々に眠り込む前半部と、目を覚ましてブランサックを愚弄する後半部に卓抜な演技力が求められる。ロッシーニは同役に優れたブッフオ歌手ニコラ・デ・グレチス ((Nicola de Grecis,1773-1826 《結婚手形》ズルック役の創唱歌手)を得て、ヒロインの大アリアに続く演劇的な山場の構築に成功している。

ロッシーニはレチタティーヴォ・セッコを含むすべての音楽を書き下ろしたが、旧作の主題や素材の借用もあり、フィナーレ〈家ではみな眠っているのに (*Dorme ognuno in queste soglie*)〉(N.8)の弦楽器の柔らかな旋律にハイドン《四季》第1部の合唱〈来たれ、のどかな春よ (*Komm, holder Lenz*)〉の影響が聴き取れる⁸。活力ある終結部も傑出し、後奏の最後から4小節目に一瞬e^bを鳴らして意表を突く着想も機知に富む。

1812年5月9日の初演はパヴェージ《マルカントーニオ殿》の第1幕と二本立てで行われ(1作のバレエも併演⁹)、成功を収めた。翌日ロッシーニは母宛ての手紙に次のように記した——「ベッドに入る前にぼくのファルサについて報告します。シンフォニアからフィナーレの最後の音までもものすごい熱狂で、大喝采しかありませんでした。ぼくは今夜も昨夜同様、舞台に呼び出されました。いまやすっかりヴェネツィア人のアイドルです」(5月10日付)¹⁰。初演の批評も、「(マエストロ、ロッシーニ氏は)沸き立つファンタジア、入念な勉強、豊富な主題、対位法、次から次へと続く音のパッセージの完璧なハーモニーの和合、そしてカンタービレにおける躍動する楽器によっても称賛に値する」と褒めている。そして「シンフォニアがそうであるように、ときに曲が少し長すぎる」としながらも、ドルヴィルのアリア、ジューリアのアリア、コンチェルタートのストレッタが聴衆の大喝采を浴び、フィナーレも他の曲をしのぐほど楽しいと述べ、最初の3回の上演はどの曲も繰り返して称賛され、ロッシーニが舞台に呼び出されて喝采された、と書かれている(『アドリア新聞』5月12日付)¹¹。

サン・モイゼ劇場では6月11日までの1ヶ月間に合計12回行われ、5月中には《幸せな間違い》との二本立てでも上演され、大成功を収めた——「土曜日にぼくの謝肉祭のファルサが上演され、歌手団があまり強力ではなかったにもかかわらず、大成功を収めました」(ロッシーニの母宛ての手紙、5月29日付)¹²。けれどもその後の再演は1813年夏にセニガッリア、1814年フェルモ、1821年謝肉祭シーズンにシエナ、1825年リスボンで行われただけで消えてしまった。20世紀の蘇演がいつ、どこで行われたのか判然としないものの、最初の重要な上演は1952年5月26日にフィレンツェ五月音楽祭で行われた¹³。

ローマにおける《デメトリオとポリービオ》初演

《絹のはしご》の初演を終えたロッシーニはヴェネツィアに留まり、5月末もしくは6月初めに友人ジローラモ・ヴィエツォーリ (Girolamo Vezzoli,?-?) のためにカンタータ《穏やかで淡い闇から (*Dalle quiete e pallid'ombre*)》を作曲した(ポルトグアルーロ・ヴェナンツィオ [Portogruaro Venanzio,?-?] 作詞。編成はソプラノ、バス、ピアノ)。これはナポレオンの養子で当時イタリア副王だったウジェーヌ・ド・ボーアルネ (Eugène de Beauharnais,1781-1824) のロシア遠征参加を記念して求められた作品で、楽曲はソプラノのカヴァティーナとレチタティーヴォ、ソプラノとバスの二重唱からなる(二重唱は《絹のはしご》ジューリアとジェルマーノの二重唱を改作)¹⁴。

その間の5月18日ローマのヴァッレ劇場 (Teatro Valle) にて、デビュー前にロッシーニが作曲した楽曲を使ってドメーニコ・モンベッリ (前章参照) が構成した2幕のドラマ・セーリオ・ペル・ムジカ《デメトリオとポリービオ (*Demetrio e Polibio*)》がモンベッリ一座によって初演された。ヴァッレ劇場は1726年にサンタンドレア・デッラ・ヴァッレ教会近くの宮殿の中庭に建設されたカプラーニ家の私設劇場で、翌1727年1月7日に開場した¹⁵。1791年に改修されながらも木造劇場としての構造を残し、1816年にこの劇場を訪れたスタンダールはそのみずぼらしさに呆れ、「材木が壁紙で覆われてさえない。わが国の地方の郡役所もこれよりましだ。幕や天井といった、絵が描かれているところはすべて、いい加減に粗悪で下手に描かれていて、こんな例を私はドイツでさえも見たことがない」と憤慨している(『1817年のローマ、ナポリ、フィレンツェ』1816年12月13日)¹⁶。

《デメトリオとポリービオ》の台本作者はモンベッリの妻ヴィンチェンツィーナ・ヴィガノ (Vincenzina Viganò [-Mombellil],?-?) で、有名な舞踏家・振付師サルヴァトーレ・ヴィガノ (Salvatore Viganò,1769-1821) の妹でもある。

原作は不明で、メタスタジオの同題の台本（1731年）に基づく他者の台本を改作したものと思われる。

■あらすじ

第1幕 紀元前2世紀半ばのギリシア。パルティア王ポリービオが娘リジंगाをシヴェーノ（男装役。劇中でデメートリオの息子と判明）と結婚させようとする、シリア大使エウメーネ（実はシリア王デメートリオ）が現れ、王子シヴェーノの帰国を求める。しかし、婚礼の強行を知ったエウメーネはシヴェーノの誘拐を試みるが果たせず、代わりにリジंगाを人質として連れ去る。

第2幕 シヴェーノはリジंगाの奪還に成功するが、エウメーネから自分が息子であると教えられ、父の許にとどまる。リジंगाは兵士を率いてシヴェーノの救出に赴くが、シヴェーノは父をかばう。最後にエウメーネが自分はシリア王デメートリオでシヴェーノの父であると明かし、2人の結婚を認めて両国の和解が成立する。

ソリストはテノール歌手のドメニコ・モンベッリと2人の娘（ソプラノのエステルとコントラルトのアンナ）、専属バス歌手ルドヴィーコ・オリヴィエーリの4人のみで、合唱も使われる。初演配役は次のとおり。

役名と声種	歌手
リジंगा Lisinga(ソプラノ)	エステル・モンベッリ(Ester Mombelli,1794-1860頃)
シヴェーノ Siveno(コントラルト)	アンナ・モンベッリ(Anna Mombeli,1795-?)
デメートリオ Demetrio[エウメーネ Eumene と名乗る] (テノール)	ドメニコ・モンベッリ(Domenico Mombelli,1751-1835)
ポリービオ Polibio(バス)	ルドヴィーコ・オリヴィエーリ(Ludovico Olivieri,?-?)

その成立は前章に述べたとおりで、ロッシーニはモンベッリからアリア、二重唱、四重唱などのテキストを単独に与えられ、これに作曲して小遣いを得た。ロッシーニ作曲と推定されるのは導入曲〈おまえは私の息子ではない(Mio figlio non sei)〉(N.1)、エウメーネとポリービオの二重唱(怒りを募らせさせないでくれ(Non cimentar lo sdegno)) (N.4)、リジंगाとシヴェーノの小二重唱〈この心はあなたに愛を誓い(Questo cor ti giura amore)〉(N.6)、第1幕フィナーレ〈私の魂に降りてきます(Mi scende nell'anima)〉(N.9)、自筆楽譜が現存する第2幕の四重唱〈さあ、シヴェーノを渡せ(Donami omai Siveno)〉(N.11)であるが¹⁷、第1幕シヴェーノのアリア〈胸は満足であふれ(Pien di contento in seno)〉(N.2)はその一部が《バビロニアのチーロ》アルジェーネのアリアに聴き取れ、合唱〈静かに歩もう(Andiamo taciti)〉(N.8)も《タンクレーディ》第1幕の合唱に改作使用されており、ロッシーニの作曲と見なしうる。(図40)



図40 第2幕シヴェーノのアリアの筆写総譜(筆者所蔵)

1812年5月18日に行われた初演は成功を収め、新聞批評も「(ロッシーニの作曲した)音楽の美しさが玄人と愛好家のデリケートな耳をくまなく魅了した」とし、優秀なモンベッリ一家の歌唱を称え、モンベッリ姉妹による第1幕の大変美しい二重唱が毎晩アンコールされ観客を喜ばせた、と記している(『ローマ県政治新聞(Giornale politico del dipartimentale di Roma)』5月23日付)¹⁸。不思議なのは、この批評を数日後に読んだロッシーニが母宛ての手紙で「ローマのオペラは当たりました。そのことが書かれた新聞で読みました」と述べ、とくに驚きを示していないことである(前記5月29日付。ロッシーニは事前にモンベッリから何らかの情報を得ていたのだろうか?)。

モンベッリが優れた作曲家だったことからロッシーニの作曲と認定される楽曲との間の様式上の違いは少なく、声楽の用法も同じ系統に属している(N.5リジंगाのカヴァティーナにおける装飾旋律、N.7リジंगाのアリアのコラトゥーラ、N.8エウメーネのアリアにおけるカンタービレ旋律とその前後の力強いテノール用法、さらに第2幕フィナーレのアンサンブルの処理はロッシーニと同質と言ってよい)¹⁹。それゆえスタンダールが「出てくる曲という曲には、最も純粋な歌、最も甘美なメロディーがこもっていた。[中略]これほど甘美で優しい曲が他にあらうか。しかし優しいといっても、イタリアの晴れわたった空から生まれる優しさであり、憂鬱や不幸のかけらもなく、強い心がほろりとした時の優しさなのだ」(『ロッシーニ伝』)²⁰と称えても不思議ではない。慧眼なスタンダールは前記ロッシーニ作曲の楽曲を称賛し、とりわけ第2幕の四重唱を、「この曲に優る音楽は世界中探してもない。もしロッシーニがこの四重唱しか作曲しなかったとしても、モーツァルトやチャマローザは彼を対等の相手と認めるだろう」と絶賛している²¹。

モンベッリ一座は、解散する1817年までの5年間に《デメートリオとポリービオ》をファエンツァ、モデナ、ミラーノ、コモ(以上1813年)、ボローニャとミラーノ(1814年)、パドヴァとミラーノ(1815年)、フィレンツェとヴェネツィア(1817年)で独占的に上演し、その間に登場人物を増やす改作も行っている。その後の再演にミラーノのスカラ座(1829年)があり、1838年ナポリのフォンダ劇場が最後となった。国外では1818年にヴィーンとドレスデン、1820年にミュンヘンで上演され、1822年にはポルトガルのポルトでも舞台にかけられた(図41)。復

活上演は1979年7月25日、バルガのディッフェレンティ劇場で行われた。

《デメトリオとポリービオ》はロッシーニの才能をローマに知らしめ、同地の興行師による接触も同年もしくは翌1813年に始まるが、これに先立ち北イタリアの二つの大劇場がロッシーニに白羽の矢を立てていた。その一つがミラーノのスカラ座で、後述するようにその契約は《バビロニアのチーロ》を作曲中のロッシーニと交わされる。そしてスカラ座デビュー作が、彼の才能とその後を左右する試金石となるのである。



図 41 《デメトリオとポリービオ》チェンバロ独奏用編曲の表紙絵(ザウアー&ライデスドルフ社、1823-26年)

—以上、第2章

¹ 全集版《絹のはしご》序文 p.XXI.

² *Lettere e documenti, IIIa.*, pp.6-9.[書簡 IIIa.2]

³ 『ソフィ、または隠された結婚』からその原作に遡ることも可能で、これについては Degradà, Francesco, *Lettura della Scala di seta di Rossini*. in Programma del ROF "La scala di seta", 1988. を参照されたい。

⁴ 全集版《絹のはしご》序文 p.XXII.

⁵ 但し、ヴェルセイユ Verseuil をブランサック Bransac、トマ Thomas をジェルマーノ Germano に変更。

⁶ *Lettere e documenti, IIIa.*, p.11.

⁷ 《イタリアのトルコ人》フィオリッラを1817年謝肉祭ヴェローナのフィラルモーニコ劇場と1820年春ナポリのヌオーヴォ劇場、《泥棒かささぎ》ニネッタを1818年秋フィレンツェのペルゴラ劇場、1819年謝肉祭りヴォルノのアッヴァローラ劇場、1820年謝肉祭バルマのドゥッカーレ劇場で演じた。その後の確認できるロッシーニ作品出演に、1821年夏リヴォルノのアッヴァローラ劇場《セビーリヤの理髪師》ロジーナと《オテッロ》デズデーモナ、1822年謝肉祭トリエステ《トルヴァルドとドルリスカ》ドルリスカ、1825年春マントヴァ《幸せな間違い》イザベッラがあり、《セミラーミデ》タイトルロールを1828年ノヴァーラと1828/29年謝肉祭ベルガモ、1829年ミラーノのスカラ座で《デメトリオとポリービオ》のリジンガがある。

⁸ 全集版や従来の作品解説にこれに関する記述は無く、筆者が最初に指摘。ロッシーニは前年5月にボローニャのアカデミーで《四季》の演奏に携わり、その音楽を熟知していた。とはいえさまざまな音楽を記憶の中から呼び出して創作のきっかけとするのはロッシーニの作曲法の一部であり、こうした手法と旧作からの楽曲転用や改作は明確に区別する必要がある。

⁹ 作曲者不詳《しつけの悪い娘 (La figlia mal custodita もしくは La figlia mal guardata)》と思われるが、初版台本に記載なし。

¹⁰ *Lettere e documenti IIIa.*, pp.12-13.

¹¹ 初演批評は *Ibid.*, n.4. に引用されている。

¹² *Lettere e documenti IIIa.*, pp.14-16.

¹³ 詳細解説と上演歴は日本ロッシーニ協会ホームページ掲載の拙稿「《絹のはしご》作品解説」を参照されたい。

<http://societarossiniana.jp/lascaladiseta.2011.pdf>

¹⁴ 従来文献は《幸せな間違い》初演でヴェネツィア滞在中の作曲としたが、ボーアルネがロシア遠征に参加した時期との関連で《絹のはしご》初演後の1812年5月末もしくは6月初めと変更された。これについては校訂者 Guido Johannes Joerg による CD 解説を参照されたい (ebs records ebs 6080)。

¹⁵ ヴァッレ劇場に関する基本情報は、Stefania Severi, *I teatri di Roma, Roma*, Newton Compton, 1989., pp.104-112. 参照。

¹⁶ スタンダール『イタリア紀行 1817年のローマ、ナポリ、フィレンツェ』(白田紘訳、新評論、1990年) p.27.

¹⁷ Daniele Carnini, *Demetrio e Polibio tra revisione ed edizione*. in programma del ROF "Demetrio e Polibio", 2010., p.24.

¹⁸ 初演批評は *Lettere e documenti IIIa.*, p.15., N.9 に引用されている。

¹⁹ モンベッリ作品の研究が進んでいない現状ではモンベッリの音楽の先進性やロッシーニに与えた影響を明らかにしえないが、他の同時代作曲家も含む影響関係の研究は初期のロッシーニの声楽様式を理解する上で重要な意味を持つと思われる。

²⁰ スタンダール『ロッシーニ伝』(山辺雅彦訳、みすず書房、1992年) 106-107頁。なお、スタンダールはこのオペラを1814年6月にコモで観たとしているが、事実ではない。《デメトリオとポリービオ》に関する彼の証言の真偽については、水谷彰良「ロッシーニのプリマ・ドンナたち(3)」～III. 「スタンダール証言の真実性について」(日本ロッシーニ協会紀要『ロッシニアナ』第3号所収)を参照されたい

²¹ スタンダール『ロッシーニ伝』邦訳 pp.107-108.